

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2017.4

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイトでダウンロードできます。置き場を提供してくださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください。

＜アワプラジオとは＞ 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV（千代田区）で出会った仲間、2009 年に開局したミニ FM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

編集長：阿部浩一 発行：インターネットラジオ アワプラジオ 105-0013 東京都港区浜松町 2-2-15 浜松町ダイヤビル 2F うんすい総研気付
info@awapuradio.com TEL:03-6856-0722 FAX:03-6856-0723 http://awapuradio.com/

通信メンバーでラジオ公開収録を行う！

番組「『アワプラジオ通信』通信」でボランティア活動について大いに語る

3月4日、東京・九段下のかがやきプラザにて、アワプラジオ通信メンバー4人による初のラジオ公開収録を行いました。今月は年度初めの特別号として紙数を増やし、収録の様子を文字起こししてまとめました。笑いの絶えなかった2時間近くに渡った収録。その音源からさらに番組「『アワプラジオ通信』通信」として編集した35分。そのまたさらに一部をここに掲載いたします。



左から浅香友里（あさかゆり）さん、宮内華子（みやうちはなこ）さん、大森周子（おおもりちかこ）さん

阿部浩一 みなさんはそれぞれ、アワプラジオ通信の活動にいつから参加していただいていたの？

浅香友里 私は2014年の11月からです。その頃は無職で、インターネットでボランティア活動を探していたのがきっかけです。もう3年目になりますね。

大森周子 私も2014年の秋にちよだボランティアセンターの告知をみて。私もちょうど無職だった時期で「何かやっておくか」という感じでした。私はそれから（本格的に参加するまで）一年くらいブランクがありました。最初は記事のまとめをやったのですが、これは無理だと思い、一回だけで終了してしまいました。

阿部 それから一年後に今度は書評を書いてよって、私がお願いして現在に至っているのだよね。運命でございませぬあ（笑）。

宮内華子 私は去年の11月号からですね。阿部さんとご飯を食べに行ったときにこの話を聞きまして。ちょうど映画が好きだし、文章も書きたかったの。

阿部 僕が口説いて（笑）。毎月締め切りがある活動ですが、良かったことや苦勞を話してください。

浅香 締め切りは大変ですね。時の流れは早く、月が始まったと思って二週間くらいしたらもう締め切りを考えなければいけないわけですからね。

宮内 常に自分が書く分野のネタは集めておかななくてはとえますね。

浅香 書評も本を読まなくてはいけないし大変ですよ？

大森 私、読んではいって何かを思っている気にはなっているつもりで、何も思っていないことがわかっただけでも収穫がありました。締め切り日が来て読み始めることも結構多いです。締め切り忘れちゃう……（一同爆笑）。浅香さん、毎月（旅行へ）行っているのですか。

浅香 毎月には行っていません。今までの旅行をためて、小出しにしています。

宮内 一年に何回くらい行かれているのですか。

浅香 だいたい3回くらいです。年末年始とゴールデンウィークみたいな感じですね。

阿部 ありがとうございます。ささやかな活動の場ではあるけれど、参加する人にとって自己表現や友達やお知り合いに「こんな活動に参加しているよ」と話してもらえるような場にしたいと考えています。ところでみなさんは、ボランティア活動という言葉にはどんなイメージがありますか。

宮内 ボランティア活動らしいことはこれまでやったことはなかったのですが、もともと私が演劇をやっている、

みんなに演劇やダンスなど芸術に親しんでもらえるような活動をやってみたくて考えています。いろんな話を聞いてみると、芸術を楽しむ余裕もないということをよく聞くので、心の栄養として。

浅香 私はそもそもボランティア活動というのは、誰かがそこにいて手助けできるような活動に名前がついたものだと思っています。今の私の旅行記を書くという活動が誰のために、誰に向けて行っているかイマイチわからないところがあるので、自分がボランティア活動を行っているとはあまり考えていません。自分が楽しいことをさせてもらっているというほうがどちらかといえば強いですね。将来、在日の外国人に日本語を教えるボランティア活動をやってみたくてと思っています。

大森 私は人から悩みをただ聞いてほしいという感じで話を持ってこられます。あまり器用ではないので、ただ聞くだけで何かを返すということはないのですが、ただ「うんうん」と言ってもらうのがいいという人がいて。これも広義にはボランティア活動なのかなと思いますね。



阿部 みなさんのアワラジオ通信以外の活動や関心について聞かせてください。

浅香 世界をまわるようになって6年目ですが、やっぱり英語は必要だなと今さらながら思い始めています(笑)。3年前から英語の勉強を始めたのですが、スペインと南米にはまっているので今度はスペイン語も勉強しようと思っています。あとはアルゼンチンタンゴをやりたいけどパートナーがいないの。阿部さん、やらない?!

阿部 私は腰を痛めて……。

浅香 頼りない! (一同爆笑)

宮内 演劇をやっている人たちは世界が演劇だけになってしまいがちなので、今は演劇を離れてライターの仕事に就いていることで広告関係のデザイナーさんなどの知り合いが増えていきます。そういう違う職種の人が集まる会をやりたいなと思っているのですが、今のところまだ実現していません。ちょっとおせっかいかもしいけれど、少しでもみんなの世界を広げていけたらなと思います。

大森 私は“特記事項なし”という感じの人間です(笑)。雑に生きています。いま興味があるのは一周まわってダイエットでしょうか。

浅香 タンゴやらない?!

阿部 4人みんなでやろうか?

大森 アワラジオタンゴ!

阿部 その名前かっこいいな。私はジムの会員になって人前で脱ぎたくなるような体をめざしています(笑)。

浅香 じゃあ楽しみにしていますね。(一同爆笑)

阿部 最後に読者の方、リスナーの方にメッセージをお願いします。

浅香 聞いていただいてありがとうございます、ということと今後も飽きずに通信を読んでいただきたいということですね。あとは旅行好きが増えてほしいです。そして、旅行に行けるくらい有給休暇が取れる社会になってほしいと思います。

大森 このメンバーの面白さがより醸成されればいいなと思うので、飽きずに2回、3回と聴いていただけたらいいなと思います。

阿部 今度は人が多くいるところでパーっとやりたいよね。(一同沈黙)。僕だけ??

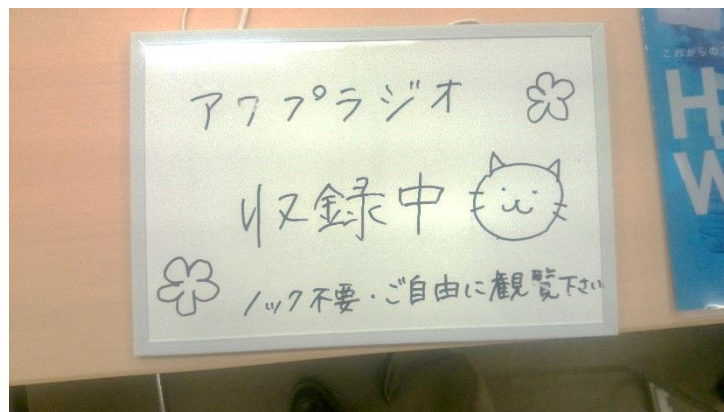
浅香 やっぱ脱ぎたがる人は違うね!(一同爆笑)

宮内 通信でも好きに書かせてもらって、今回も好きにしゃべらせてもらったので聴いてくれてありがとうございますって思いますね。私の同世代である20代の人たちも余裕がないということを感じます。親や周囲に言われたことを気にしてしまうという子が周囲には多いので、自分の好きなことをやって本当に好きなものを好きと言えるような世の中になってほしいと思います。

私はボランティア活動とは、「誰かがそこにいて、手助けできるような活動に名前がついたもの」だと思っています。(浅香友里)

何かを返さなくても人の悩みをただ「うんうん」と聴いてあげられること。これも広義のボランティア活動なのかなと思いますね。(大森周子)

みんな芸術を楽しむ余裕もないと言います。演劇やダンスなどに親しんでもらえるような活動してみたいですね。芸術は心の栄養ですから。(宮内華子)



掲載した内容(番組)は、インターネットでいつでもお聴きいただくことができます。感想などもどしどしお待ちしております。



<http://awapuradio.com/2017/03/04/170304/>



6年目の3.11。魅力的なイベントや共感できる企画がいろいろあったけれど、今年は一人で静かに過ごすことにしました。14時46分に部屋で一人が黙とうして、その後は近所でハンバーガー（ビッグサイズ）を食べて買い物して。

私は当時、今とは比べものにならないほど脱原発運動にガツリかかっていたのですが、東京電力・福島第一原発事故を機にガラリと様相は一転しました。

それまでは都内で有志による毎月の定例デモをやっても参加者数名。参加者より多い警備の警官には邪険にされ、沿道の人々の視線は奇人変人を見る目といった感じでした。

ところがいつも通り事故前から予定していたデモには、情報に飢えていた1,500人も人が押し寄せました。少なくとも私の周りの人たちはみんな「こんな事故が起こるくらいなら自分らは“オオカミ少年”のままでよかったのに」という

ような心境でした。

あれから6年。世間の動向や脱原発運動のあり方そのものについても、思うところはいろいろありますが、この期に及んでまだ原発を推進するなんてこと、本当にひどい話です。稼働させたときに出る放射能のゴミの捨て場もない、処理する方法も確立されてない。火事や爆発、交通事故も大変ですが、原発が事故を起こせばその影響はそれらの比ではありません

本来なら美しい国とか愛国心がどうしたとか言う人こそ、原発に率先して反対すべきなのに。気を付ければ大丈夫とか、技術革新がどうのとかって、もう希望的観測で大事なことを決めないでほしい。いまだに神風特攻隊かよって。

経済発展のためのエネルギー供給だったら原発である必要はないし、むしろ事故が起こったときの損失を考えればとてもしゃないけれど、真っ当な商売人なら扱いたいと思うような代物ではありません。

そもそも原発は需要に応じて調整が効かない、必要なくても100%稼働させるか、電気が必要なときでも動かさない理由があれば止めておく（0にしておく）しかない“使えない”仕組みです。

原発をやめることに右も左もなければ、頭が良い悪いもありません。デモに行かなくてもいいし、拳を振り上げなくてもいい。だけど時々、6年前のあの不安だった気持ちを思い出してほしい。そんなふうに思います。

最近あまり原発のことを書くことがありませんでした。新しい原発をつくることができない限り、どんなに推進したい人たちががんばっても、遅かれ早かれ原発は減っていくでしょう。だけど事故から6年が経過して無関心が広がる今、ふと書いてみたくなったのでした。（阿部浩一）

ヨムヨム旅行記 ユーヤイコの子供たち（北部アルゼンチン②）



アンデス山脈の中にユーヤイコという山がある。標高は6723mとアンデスの中では7番目に高い。4000mを超えると高山病を発症する私にとってはまさに雲の上の頂、である。しかし500年以上も前に、その場所で生活していたインカ民族がいた。彼らはインカ帝国の繁栄を讃えるため「カパコチャ」という儀式を営み、聖なる少女と従者の子供がふたり、神への生贄として捧げられた。子供たちは、1999年に発見されるまでユーヤイコ山頂の土中で眠り続けたのだが、高所という寒冷の気候に加え、アンデス特有の乾燥した環境のもとにあったため、亡くなった瞬間の状態をほとんど保ったまま発見された。

顔や手などの皮膚に皺はなく、肌は押せば弾き返しそうな弾力すらありそうだ。細かく編みこまれた黒く豊かな髪は、抜け落ちることもなく、彼らの小さな顔の周りを縁取っている。眺めていると、今にも長い睫毛を動かして目を開けそうな気さえするほどだ。さらには僅かに開けた口の中に見える、小さな歯列までもが、こちらへ生命力を訴えかけてくる。彼らは生後数年から十数年でこの世の生を終えたが、その姿形は500年以上も保っていた。

ミイラと聞いて、ビーフジャーキーのような姿を想像していた私は、少なくない衝撃を受けた。同時に世界の広さを、彼らの小さな身体から感じた。日本で生まれ育った私の想像を遥かに超える、環境や、場所が世界には存在しており、そこにも人類の軌跡がある。そんな当たり前のことを、実体験として彼らが教えてくれた。

サルタ市に、首都ブエノスアイレスの都会的な洗練さはない。無骨な石造りの街並みに、市場の喧騒、街行く人たちは生活感に溢れ、広場にはいつも人が集まりお喋りをしている。その典型的な地方都市にある、国立高所博物館の円筒状のガラスの中で、500年以上の時を超え、彼らは今も眠り続けている。 *注釈：ミイラ三体は状態保持のため半年ごとに一体ずつ交代で展示されている。（浅香友里）



「普通じゃない」。そのことが強さにもなり、苦しみにもなる。奔放な母(ミムラ)に家出された小学生のトモ(柿原りんか)。身を寄せた叔父マキオ(桐谷健太)の家には元男性の恋人・リンコ(生田斗真)がいた。まさに「普通じゃない」恋人。だけど、料理上手で世話焼き、リンコはトモにとって初めての「母親らしい」存在になっていく。

三人の奇妙だけど、ほのぼのした暮らしと反対に外からの目は厳しい。トモは学校で「変態家族」と言われ、友達もいなくなってしまう。トモの同級生の母(小池栄子)は、リンコを「変な人」呼ばわりし、裕福なマダムとして見栄を張る。母の陰で、ゲイであることに悩む同級生。ほのぼのとした柔らかい世界観の中で、「普通じゃない」人たちの思いと外からのギャップ、苦しみが描かれる。さまざまな人々からのトランスジェンダーへの目線が描かれているので冷静にとらえることができる。

理解されなくても立ち向かう叔父夫婦(?)に影響され、あきらめている目つきのトモが子供らしくはしゃいだり、たくましくなっていく。最近ではLGBTに関することが話題になることも増え、今後は日常でも当事者が自身のことを公表する場面も増えていくだろう。息子=娘をありのままに受け止めるリンコの母(田中美佐子)に救われる。そして苦しんだ過去を優しさに変えていくリンコや、ワケありの恋人や傷ついたトモを優しく包み込むマキオ。こんなふうにならなければそれぞれの個性を受け入れ合える家族が増えたら平和になるだろう。(宮内華子)

『GREEN BOOKS』

～本の紹介～

また、桜の国で (2016年10月) 須賀しのぶ 著 祥伝社・1998円



第156回直木賞候補となった本作は、第二次世界大戦中のポーランドを舞台とした小説である。ロシア人を父に持つ外務書記生の棚倉慎(たなくらまこと)が、ポーランドに赴任し、戦争回避に向け奔走する中、ドイツがポーランドに侵攻され、戦争が勃発する。少年時代におけるポーランド人少年との出会いから始まり、赴任後はポーランドで仕事をし、さまざまな人に会う中でポーランドへの思いを深めていく。

私は歴史について非常に不勉強で、第二次世界大戦も漠然とした知識しかなかったが、本書で戦時中の各国の動きについて、ポーランドを観測点として時間の流れとともに感じ、戦争について知る機会となった。ドイツに攻め込まれた時、ポーランドの人が何を考え、どのように生きたかなど、想像が及んでいなかった。

国同士が戦争をしていたとしても、その中にいる個人はそれぞれの思いを持ち、国を超えて友好を築くこともある。抗いきれない力や流れにのまれた時、人に最後に残されているのは、誇りを持って生きることであるように思った。

本書は、慎をはじめとして、自分がどこの国の人間であるというアイデンティティーがシンプルに一つの国でおさまらない登場人物たちが物語の中心となっている。舞台が戦時中なだけに、国を大切に思う気持ちについてもどうしても考えさせられるが、それがより本質的で、抵抗感を感じさせないものとして受け止められた。(大森周子)

児童養護施設の子もたちのサッカーチーム「東京フレンズ」応援サポーター募集中!

お知らせ

私(阿部)が広報を担当している、社会福祉法人 福田会(ふくでんかい・東京都渋谷区)が運営する児童養護施設の子もたちを含む都内63施設の選抜メンバー10人によるチーム「東京フレンズ」が、7月15日～16日にポーランドのワルシャワにあるレギアスタジアムで開催される「第5回児童養護施設の子もたちのためのサッカーワールドカップ」へ、昨年に続いて出場することが決定しました。



子どもたちを世界へ

児童養護施設として日本で最も古い福田会には、1920(大正9)年、第一次世界大戦後にシベリアで孤児となっていた子どもたちを受け入れた歴史があります。その後、長く交流が途絶えていたものの2010(平成22)年、散策中だった当時のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ駐日ポーランド大使が、偶然福田会の前を通りかかって「あの福田会がまだ存在していたなんて」と驚き、声をかけられたことがきっかけとなって、ポーランドと同会の交流が再開した経緯があります。

そしてこのサッカーワールドカップへの招待にもつながっていますが、昨年あった共同募金会の助成金200万円が今年は無く、資金面で岐路に立たされています。そこで現在、インターネットで資金を募るクラウドファンディングに挑戦中です。あなたもぜひ「東京フレンズ応援サポーター」となって、子どもたちを応援してください。支援金額1,000円から。実施期間は4月27日まで。

養護施設の子もたちをポーランドのサッカーワールドカップへ!

<https://readyfor.jp/projects/poland-football>



「本の紹介」で取り上げられた『また、桜の国で』の作中に1920年の福田会が登場します。